

論文審査結果の要旨

氏名 里光 やよい

〔背景と目的〕国は超高齢社会を見据え、療養生活の拠点を施設から地域におく方針を打ち出した。その後チーム医療の推進に関する検討会を経て、今後の在宅医療を支えていく看護師を「特定行為に係る看護師」(Nurses Pertaining to Specified Medical Acts) と命名し、2015 年 10 月より計画的に養成する事になり特定行為研修が開始された。

論文提出者は特定行為研修の機関として指定された A 機関に所属し、特定行為の気管カニューレ交換に関する教材の作成を担当し、初版および第 2 版を作成し、当研修の実施に係わってきた。気管カニューレの交換に係る看護師の活動は 2016 年 10 月より開始されたが、個々の実践報告は散見されるものの、特定行為に係る看護師の気管カニューレの実践に特化した成果に関する研究報告はない。

以上のような経緯から、本研究では特定行為に係る看護師の気管カニューレの交換の実践における成果について検討することを目的とする。

本研究の主たる構成は、(1)研修教材の作成およびその経過、(2)特定行為に係る看護師の実践による成果および評価（①当該看護師による成果および評価、②患者家族による成果および評価）である。

〔対象および方法〕対象は初版および第 2 版の研修教材で学び研修を修了し看護師のみで気管カニューレ交換を 2 回以上行った経験を有する看護師である。そして、当該看護師に対してインタビュー調査を実施する。インタビュー内容は、気管カニューレ交換の実践状況、患者や家族への影響、他職種との連携、組織への影響等である。さらに、当該看護師から気管カニューレの交換を 2 回以上受けている患者家族にイン

タビュー調査も行う。インタビュー内容は、疾病の経過と当該看護師の実践に対する気持ちや意見、これまでと変わったことについて等である。

調査法は直接面接法で、実践状況については半構造化面接法で聞き取る。面接内容は同意を得た上で IC レコーダーに録音し、分析にあつては質的帰納的分析方法でカテゴリ化する。

〔結果〕対象者数は初版の研修教材を用いて研修を修了した看護師が 3 名、初版および第 2 版の研修教材を用いて研修を修了した看護師が 13 名であった。また、患者家族は当該看護師（訪問看護師）の実践を受けている 1 名であった。

以下において、実践活動の成果として抽出されたカテゴリを記述・説明する。①当該看護師のみる患者への成果としては、カニューレ閉塞回数の減少、呼吸器感染の減少、気管孔周囲の皮膚トラブルの回避、会話や気管孔閉鎖に向けての支援の加速、経管栄養の定時の実施等が抽出された。②安全性の確保においては、呼吸状態・全身状態のトータルな観察と判断、手に伝わる感覚を掴み確実なカニューレ交換、医師との連携による安全な実施が抽出された。医師および他職種との連携では、医師との幅広く細かな連携・協働、言語聴覚士との連携・協働等が抽出された。当該看護師への影響としては、自律した看護の実践、自己研鑽、医師の方針に沿う在宅看護のビジョンの確保が抽出された。

患者家族による当該看護師の実践に関するものは、カニューレ交換の恐怖と命を守る重圧の軽減、緊急交換の減少等が抽出された。

〔考察〕カニューレの閉塞の回避というのは、特に在宅療養患者に対しては、呼吸状態を危機状態に陥らせることなく療養生活を継続できるための大きく成果である。また、療養生活を支える家族に対しても、かなりの重圧である緊急交換の減少は大きな成果である。さらに、呼吸器感染の予防については 2 週間毎の定期的な気管カニューレの交換によ

ってもたらされた成果である。その実践を支えるのは当該看護師の安全に配慮した呼吸状態・全身状態のトータルな観察と確実な技術の習得によるものである。また、日常の観察や看護の実践は看護職同士の連携により、トータルな観察や気管孔周囲の皮膚トラブルの回避につながっている。さらに、これまで以上に医師や言語聴覚士と連携・協働し、適切なカニューレの変更についても自律的に活動し、タイミングよく実践が進んでいる。当該看護師がリーダーシップを発揮しチーム医療の要となり、さまざまな活動を行っていることが示されたと考える。当該看護師が自律した実践を行えるようになるには、研修時から自施設での実践時には医師の指導が不可欠であり、組織全体の当該看護師への理解とバックアップが重要である。しかし、症例の確保や指導医の確保、組織の理解に苦慮しているというのが現状である。

〔結論〕当該看護師の気管カニューレの交換を実践により「カニューレの閉塞の回避」という生命維持に関わる重要な成果が確認された。また、さまざまな成果が抽出され提供する医療の質が向上していることが示唆された。特定行為に係る看護師の養成は超高齢社会における地域医療の推進に大きく貢献できることが示唆された。そして、本研究は特定行為・気管カニューレの交換に関する当該看護師および患者家族による成果評価を実証的にまとめた先駆的な研究であり、博士（保健学）の学位の授与に値するものと認められる。

【論文審査委員】

(委員長)	教授	宮城	重二
	教授	小林	正子
	教授	遠藤	伸子
	教授	山下	俊一
	教授	藤巻	わかえ